ミュージアム・レター

Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.13

発行日 ● 平成22年（2010）5月20日

もくじ

ごあいさつ……………………1

史料館収蔵錦絵のご紹介……………………1

新聞錦絵……………………2

「箱館大戦争之図」……………………3

Information……………………4
- 史料館講座のご案内
- 展覧会のご案内
- ピラミッド校舎は今

1. ごあいさつ

昨秋、館長となって認識を新たにしたのは、大学史料館の史料は文書だけではないということでした。絵画などの「もの」も意外に多く、中でもここに取り上げた新聞錦絵は、文字と絵が結びついた独特の史料といえます。

もう一つ気づいたことは、史料館は単に史料を保管する場ではなく、人が史料と出会い、史料を息づかせて語らせる場だということでした。当館で行う催しが、かくして甦った史料を皆様にお引き合わせする機会となるよう願っております。

（館長　高橋裕子）

2. 史料館収蔵錦絵のご紹介

第62回史料館講座「江戸のメディア　浮世絵―歌麿・北斎・広重など、海を渡った作品群」が6月14日（月）に行われます。また、史料館講座当日を含めた3日間、国際浮世絵学会主催、史料館共催の特別展示「市川亀治郎コレクション　役者絵展」を開催する予定です。

今号ではこの2つの企画にあわせ、史料館所蔵史料のうち、旧制歴史地理標本室資料と男爵大鳥圭介史料の中から錦絵をご紹介致します。

旧制時代の学習院には「博物」と「歴史地理」の教科があり、それぞれに標本室を有していました。明治22年（1889）に歴史地理の教科が定められた後、いつの頃から標本室が存在したかははっきりしませんが、昭和5年（1930）に中等科教場（現在の西1号館）が建てられると、その3階の一角に歴史地理標本室が置かれることとなりました。考古資料やアイヌ、南国パラオの民族資料、工芸品、地球儀などの模型、標本類など多岐にわたる資料は、学習院の学生が博くこの世界を学ぶための標本教材として収集されました。島津製作所やドルメン教材研究所から購入されたもの、尾張徳川家の藩校に端を発した明倫博物館や当時学習院を管轄していた宮内省から移管されたものなど、さまざまな経路から集められたこれらの教材の中には、当時の学生の手により発掘された考古遺物も収められています。

新制学習院に移行の後、歴史地理標本室は閉鎖され、標本類は学習院大学図書館に引き継がれた後、その大部分は史料館に移管されました。ご紹介する新聞錦絵もそのような来歴の史料の一つです。

月岡芳年画「郵便報知新聞」開版挨拶（明治8年）

旧制歴史地理標本資料は、現在、展示を通して一般の方にご覧いただく他、博物館学芸員資格取得のため史料館にやって来る学生の実習や、大学・高等科の授業でも活用されています。「箱館大戦争之図」を含む男爵大鳥圭介史料は現在整理中で、今後公開していく予定です。

（学芸員　吉廣さやか）

3. 新聞錦絵

新聞錦絵とは、新聞記事とその内容を絵画化した木版の多色刷り版画(＝錦絵)を指します。発行時期は明治7年から8年(1874〜75)の間に集中し、以降またたく間に終息に向かいました。その最も早い例は、『東京日日新聞』(明治5年2月創刊の日刊紙)の記事をもとにしたシリーズで、明治7年8月に発刊されました。これがヒットすると翌年には、『郵便報知新聞』でも新聞錦絵が発行されます。現在知られる両新聞が発行した新聞錦絵を合わせると170点以上に及びます。

メディアとして新聞錦絵には現代の新聞のような速報性はなく、もとになった新聞記事の早くて1〜2ヶ月、遅いものでは2年半以上後という時間差があって出版されました。とはいえ新聞錦絵が果たした役目のひとつは、明治初頭に登場した日刊の「新聞」を、江戸時代から絵草紙屋の店頭を飾った「錦絵」を通じて、人々に馴染みのメディアへと橋渡しする点にありました。

新聞錦絵を手がけたのは、幕末の人気浮世絵師・歌川国芳の弟子である落合芳幾(1833〜1904)や同門の月岡芳年(1839〜1892)でした。内容は、いわゆる現代の三面記事にあたるような人情ものが多く選ばれました。江戸時代、この種の刊行物に規制がかけられていた事情をふまえれば、明治初頭の人々にとって新聞錦絵は、速報性はなくとも充分新しくて興味深く、手に取りやすい媒体であったと思われます。

挿図1・2は、『東京日日新聞』の記事をもとにした落合芳幾の手になる新聞錦絵です。画面上の記事によると、1は病気の老母のために谿谷に氷を探しに行った孝行息子、2は漁師が転覆する舟中で家族にしたためた瓶入りの遺書がサンフランシスコに漂着、やがて遺族の元に届けられたという内容です。どちらも画面には額縁を思わせる赤い枠があり、天使がリボン状の横書きの題字欄を持つなど、西洋風の演出がみられます。一方、絵自体は江戸時代の錦絵の武者絵に近く、特に挿図2は沈没する舟中で決死の覚悟を決めた人というよりは、絵の天地を逆さにすればまるで芳幾の師・歌川国芳の大ヒット作「通俗水滸伝豪傑百八人之壱人」(参考図)に登場する、水中で敵をむんずと捕まえる英雄のように描かれました。挿図3は『郵便報知新聞』の記事をもとにした小林永濯(1843〜1890)の作で、力士・綾瀬川が両国橋から身投げしようとする男を救ったという内容です。

絵の細部に注目すると、毛彫りや微妙な顔の表情を生みだす彫りの技術、様々なぼかしを用いた刷りの技術など、江戸時代以来の錦絵製作の高度な技法をそのまま活用していたことがわかります。しかし明治9年頃から「平仮名絵入新聞」が普及し始めると、新聞錦絵はわずか数年間でその役目を終えたのでした。

(助教　鎌田純子)

挿図1. 落合芳幾画「東京日々新聞」(明治7年10月)

(参考図)
歌川国芳画「通俗水滸伝豪傑百八之壱人 短冥次郎阮小吾」
鈴木重三編著『国芳』平凡社(1992年)より転載

挿図2. 落合芳幾画「東京日々新聞」(明治7年8月)

挿図3. 小林永濯画「郵便報知新聞」(明治8年)

4. 「箱館大戦争之図」

明治初頭、錦絵の恰好の題材となったのは、戊辰戦争、西南戦争など維新期の動乱でした。これらには幕末に舶来した赤色の化学染料・アニリンが多用され、いわゆる「赤絵」と呼ばれる明治期独特の特徴が多くみられます。ここに紹介する当館所蔵の男爵大鳥圭介史料のうち「箱館大戦争之図」(永島孟斎画)もそのひとつ。画面右端に検閲の証である改印が捺されていますが、印文不鮮明のため製作年は分かりません。ただし錦絵に改印が捺されたのが明治8年(1875)8月迄となるため、それ以前の作であると推定されます。

三枚続きの横長大画面からは、まるで舞台劇の一場面をそのまま切り取ったかのような印象を受けます。まず目を引くのは、画面中央の、馬上から刀を振り降ろさんとする人物・旧幕府歩兵奉行松平太郎と、松平の刀をうけ仰向けに倒れかかる新政府軍兵。松平に続く馬上の人物が大鳥圭介、その隣で槍を手にした人物が榎本武揚、旧幕府軍の先陣をきって新政府軍に斬り込んで行く人物が土方歳三です。斬り倒されているのは新政府軍兵ばかりで、一見、戦況は旧幕府軍に優勢のように描かれます。背景には遠く日の丸を掲げた船艦と、それと対照的にもくもくと煙を上げて今まさに沈まんとしている船艦とが配されています。全体として旧幕府軍の奮戦ぶりが伝えられる描写・構図となっており、明治初頭の市民感情の一端が偲ばれます。

熾烈な戦闘の末、旧幕府軍は新政府軍に敗れ、明治2年(1869)5月11日、榎本武揚の降伏により箱館戦争は終焉を迎えます。大鳥圭介は、東京大手町の軍務局糾問所に投獄され、明治5年に出獄。その後、学識を高く評価され、明治政府の数々の要職を経て、明治19年に学習院長、さらに華族女学校長を歴任、同33年に男爵に叙爵されました。この錦絵を大鳥が実際に目にしたかどうかは分かりませんが、そうであればはたしてどのような思いで、若き日の自分が登場するこの三枚続絵を見たのでしょうか。

(助教　鎌田純子)

永島孟斎画「箱館大戦争之図」(明治初頭)

Gakushuin University Museum of History　Museum Letter No.13

Information

第62回　学習院大学史料館講座

「江戸のメディア 浮世絵—
歌麿・北斎・広重など、海を渡った作品群」

●平成22年6月14日(月)　18:00〜19:30
講師：藤澤紫氏（学習院大学非常勤講師・国際浮世絵学会常任理事）

●学習院大学創立百周年記念会館正堂
＊入場無料・事前申込不要

共催展示

「市川亀治郎コレクション　役者絵展」

国際浮世絵学会との共催で、3日間の特別展示が開催されます。歌舞伎役者・市川亀治郎さんが所蔵する役者絵のコレクションの一部が公開される貴重な機会ですので、ぜひご観覧ください。

●平成22年6月12日(土)・13日(日)・14日(月)
開室時間　9:30〜18:00
●学習院大学史料館展示室（北2号館1階）
＊入場無料

ピラミッド校舎は今

ミュージアム・レター第8号で解体の様子を特集したピラミッド校舎の頂部が新中央教育研究棟前の広場に設置されました。枝垂れ桜の下で、これからも学習院の歴史を見守り続けてくれることでしょう。

南1号館北側にモニュメントとしておかれた
中央教室(ピラミッド校舎)頂部

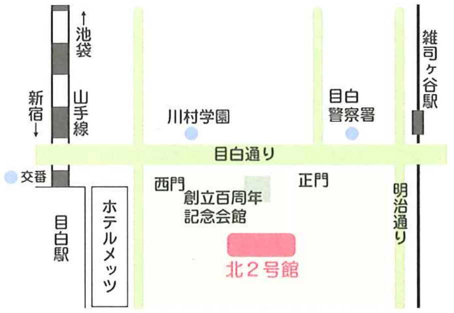
平成22年度　学習院大学史料館　第30回常設展

「学習院と文学—
雑誌『白樺』が生まれたところ」

今からちょうど100年前の1910年に創刊された雑誌『白樺』。例えば有島武郎や志賀直哉、武者小路実篤、里見弴など、白樺派同人の多くは、学習院の出身者でした。また、三島由紀夫や辻邦生、福永武彦といった文学者も学習院の卒業生であったり、教鞭をとったりした、ゆかりのある人物たちです。

彼らの足跡を関連資料と共にふり返りながら、学習院と文学との関わりをご紹介します。

●平成22年10月1日(金)〜12月11日(土)
●学習院大学史料館展示室（北2号館1階）
東京都豊島区目白1-5-1
JR山手線目白駅下車　徒歩3分
＊入場無料



ミュージアム・レター第13号
2010年5月20日発行

〒171-8588
東京都豊島区目白1-5-1
電話 03（3986）0221
内線　6569
FAX 03（5992）9219

Gakushuin University Museum of History
学習院大学史料館

● ホームページもご覧ください
http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua